

俺は最近建築物自体じゃないところに興味を持っていて、たとえばいろんな建築を評論してみてその返ってきたレスポンスとの対話をどんどん積み重ねていったときに、ああ結局自分が建築だと思ってたことはこれなんだっていう最終的な落とし所がそこに生まれてしまう何か、をそういう対話の中に見つけ出すっていうのも面白いと思う。

だから、あの建築系ラジオの適当さは評価しかねるけど、でも結局建築系ラジオを積み重ねてくと実は建築家って文章でも適当なこと言ってたんだよなって裏返しが見えてくる。そういう点で、あれ面白い。ラジオと同じで声みたいなのを適当に発してるの。しかもそれを審査する側もない。だからインタラクティブな Skype(スカイプ) のようなもので建築家発言してみろよって思うの。

上野- でも、あれはあくまで建築系ラジオじゃないですかやっぱり。

金子- だからなんか変なコミュニティでしょ。閉じられたコミュニティでしかない。

上野- インタラクティブじゃないんだから結局適当なことを言っている、それを見抜けるのもまた建築家しかいない。

金子- そう。だから例えば俺はあれを適当だと言ってもいいんだけど、そう言った瞬間に逆に批判されるわけよ。なんだろう。あの映画でさあ「ヴィレッジ」って見たことある？そういう村落共同体の恐ろしい逸話の中で生きている人たちの映画なんだけど、そこから一歩外にでてしまったってところ…ちょっとこれは観てほしい(笑) あんまりすげーなって思う映画ではないけど、観るとああ俺らってこんなもんかって思う。だけど彼らって映画を語ってみせたりするわけじゃない。建築知識とかに映画のこと書いたりとかしてんのよ。それと同じように普通の人が建築を語って見せた時に、あなた達どういう反応するの？って。嫌悪するじゃない、って俺は言いたいわけ。つまり、自分たちが語られることには嫌な状況なのに自分たちは他のことを語ってみせられるっている万人的なやり方って違うと思う。

大倉- まさに建築界ですか。

### ポピュリズムの中で建築を演じる—

上野- んー、でもそれもわかる話なんですけど、論ってなんだって話のときに…。

金子- いや論なんていいんだよ。だからそれが趣味の問題の闘争に繋がるわけよ。結局好き嫌いで戦うんだったら、戦えばいい。にもかかわらずそうじゃなくて論を発してみせるってことを専門家としてやるっていうんだったら専門家としての責任を問えてことを言いたい。

上野- でもあの講演の時、丸山先生が「すべての建築を選択した人間は、皆建築家にならなくてはならないという前提のもとにしか論が成り立たない」って言ったその論とその前提っていう関係してみるとわからない。

金子- だから自由に対して自分で選択する自由はあるじゃん。建築家を職業として選ぼうとしてるって、教育を受けようとしてる。その自由な選択をしたんだからそこには責任が発生するだろうって話。

上野- それはわかります。であるなら建築系ラジオも建築って銘打っているわけで、そこには建築家としての責任がまわりついてくる。

金子- まあアカデミズムじゃないところから建築を語るってことがどういうことかっていうのをまず問わなきゃならないけど。でもあれは建築家の責任なんて関係ない。日頃のおしゃべりでしょ、今のこういう感じと同じで。学生がそれやるんだったらまあいいよ。だけど彼らは仕事してんだよね。だって作家だよ。

上野- だけどそれが建築系と銘打たざる負えないことの限界なのかもしれないですね。だって、例えば—



2009年4月28日。まんぶく食堂でのケンチク議論はまだまだ止まらない。vol.1「東京から地方を語る」に続いて今回は「ケンチク・ポピュリズム」というテーマで僕らの議論の現場をお送りしたい。「建築」をどう開いていくべきか、建築家のメッセージをどのように発信していくのか。建築系ラジオに見られるポピュリズム(大衆性)の是非を問い、今一度建築について議論することの必要性を確認する。

—kumo+金子祐介/2009.05.06 <http://studiokumo.web.fc2.com/>

### 声みたいな建築を発信する—

大倉- 最近「建築系ラジオ※」はじめて聞いたんだけど、ラジオって音声はかなりダイレクトに入ってくるから結構内容がわかりやすいんだよね。

金子- だけど、逆に適当なこと言ってて編集できないから怖い。緊張が走る。だけどあの建築系ラジオは緊張なんてしてないから適当なこといっても流される。

大倉- そこは南(南泰裕)さんがうまくやってるんじゃないですか。

上野- そんな気がするね。わりと大変そう。

金子- その点、丸山洋志って人間はそういうところに誠実で、絶対適当なこと言わない。あの最後の講演会(芝浦工業大学での特認教授としての任期を終えた丸山洋志先生の送別会)あるでしょ？あの時は台本用意してないんだけど、その前の日に俺と飲みながら話すこと全部話してるんだよ。その時「別に相手するのはいいですけど、南さんはきっと違うこと聞きますよたぶん」っていったけど、もっくからね！そこに、南さんを。あれはすごいなあ

大倉- 確かに結構丸め込んでた(笑)

金子- だけどあの講演会で無理やりにも話をもっていった、「すべての建築家は教育者でなければならない」っていう事を考えることは結構重要なんだよ。自分が発した言葉が、人にどういう風に、いやそれが社交性なんだけど、どういう風に響くかってことを常に考えながら、頭の中で練りながら言葉を考えなきゃならない。一個一個そういうことが建築家を育てるのだとしたらだけだね。その建築家をつくることの連鎖の中でしか建築が生まれないのだとしたら、ってことを考えながらやらない人は建築家じゃない。

大倉- それが前回の話にもつながるんですか？

金子- 同じ。だから普通の人にもどういう風にしゃべるかってことをちゃんと考えなくちゃいけない。

大倉- 共同体をつくるっていうのもある種社交性を保つ上で重要ですね。

金子- でもさっき俺が言ったことは本当に重要だよ。お前のお父さんお母さんに話せるかっていう話だよ。

## ポスト・アカデミズムからのぞむー

上野ー 金子さんが、これが建築だって思わせてくれた先生っていうか、人物っていうのは誰なんですか。

金子ー え。いるじゃん。言葉にしないけど。

山道ー 丸山先生ですか？

金子ー いや。丸山さんは、あの別に師匠だとは思わない。まあ八東さんかな。八東さんは俺の中では大きかった。彼の書いてきたものの順番をみると、彼の生き方が見えてくる。彼はどういふふうに全体主義に陥らないようにしながら、全体主義を描くかってことをすっごい考えてる。ナチズムにならないように全体主義を描くか、っていうとあれだけど、ナチズムにならないように自分の理想をどうやって描くか。でもそれは、いままで書いてきた順番をみればわかるわけ。「批評としての建築」ってあるでしょ。で、自分の自我ってものがなんなのかってことに整理をつける。で、そのあとに「ナチス第三帝国」ってのを書く。で、自分を反省するわけ。でも結局血の問題は争えないからって言って、何個か書いたあとに「思想としての日本近代建築」。そのスパンを見てみると大体、ああこの人のやりたいことって何なんだろうなってタイミングで次がでてくる。だから俺はそうやって読んでる。

上野ー え、じゃあ。あのゼミ（八東研究室のゼミナール）での金子さんのパワポにさりげなく挟んであったナチの絵ってもしかして…。

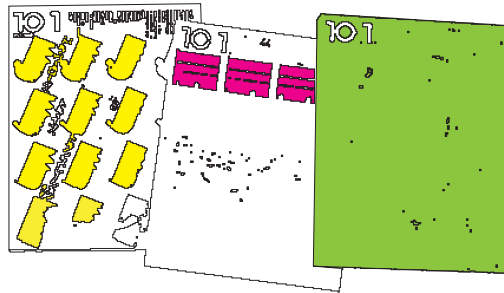
金子ー 今の八東研と似てますねって。

上野ー 八東先生の流れに沿ってるパワポって作りだったわけですか。

金子ー うんああそうだよ。

上野ー なるほど。でもそうですよね。じゃなきゃあんな線上都市なんてもの構想しませんよね。

金子ー うんそうだよ。でも俺はあえて乗ってますよって態度をわざとあのパワポでみせた。でも、それが国民ってものなんだよって問いつつも、でも民主主義ってなんですかねっていった瞬間に八東先生の眉間がひきつった。



上野ー でもそれっていうのはよく考えてみるとなんなんですかね？結局ナショナルリズムを突き詰めないで、自分のやりたいっていうこと（理想）を、ある意味ナショナルリズムを利用してっていうか…。ん〜…やっぱり、近代的自我を備えた人間の集まりとしてナショナルをみるのか、それとも…。ってことを考えることでしか、さっき話にあったような「ナチズムにならないように自分の理想をどうやって描くのか」ってことを問えないんじゃないですかね？

金子ー モダニズムっていうのは、それを国民の問題だとした時に、その国民の問題っていう視点をどこに置くのか。マスとしてみるのか、それとも自我の問題として見るのか、で全然違う方向へ進んでくわけ。

上野ー 八東先生はマスとして見ている気がします。

(FM ラジオの) J-WAVE とかでたまに建築家が一般向けに話していることがあるけど、そういう意味では全然大した話なんてできてないですもん。それを建築系と銘打つことである程度可能にしてる気はする。そういう意味での前提は必要な場合もある気はする。

金子ー そうじゃない。やっぱり安藤忠雄さんとかも J-WAVE とか BayFM とかだとダメなんだけど、これがテレビになると、あのオーラを途端に発揮するんだよね。でもラジオのあの、ナビゲータの生みだしてる空気の中では安藤さんの声でもちょっとまだ自分を作れてない。結局ポピュリズムの中で自分をどういふ風に披露してみせるかっていうことが意識的じゃない。特に建築系ラジオなんて特にそういうことを省いてるじゃん。

上野ー やっぱりあれは建築‘系’ってところがミソなんじゃないですか。建築っていうところで限定をかけながら‘系’ってとこでノリを軽くしてポピュリズムに開いていく。‘系’ってとこでいろんなしがらみを全部吹っ飛ばしている感じはする。

## ガールズトークに習うー

金子ー とこで宮台真司ってわかる？俺らの頃の尊敬する批評家って、もう社会学者かもしれないけど宮台真司だったわけ。知ってるかな、あのブルセラの女の子と援交してそれを渋谷のリサーチとして本にしちゃった人なんだけど。

山道ー すごいですね。

大倉ー 聞いたことがあります。

金子ー 宮台真司は郊外論とかを一番はじめに書いた人でもある。東工大の郊外系の人達を作ったのは宮台真司。いる？なんか読んでて違うジャンルで面白いなって思う人。

大倉ー 批評家ですか？

金子ー 批評じゃなくてもいい。批評でもいいけど。蓮實さんとかは？

山道ー 蓮實ですか？

金子ー 蓮實さんって知らない？もうそういう世代じゃない。蓮實重彦。んじゃ誰だ？他の本って読まないの？

山道ー 建築以外の本は一。最近「養老孟司」読んでます。

金子ー 養老孟司かあ。

山道ー 「バカの壁」と「死の壁」

上野ー 坂本龍一とか。

金子ー 何が面白い坂本龍一の？

上野ー あの人ニューヨークに住んでるんですよええ、在住で。

金子ー だからなんだ（笑）

上野ー え、いやまあちょっと…それ以上踏み込まれても…。（笑）

金子ー 違うんだよ。南さん（建築系ラジオの南泰裕さん）とかそういう風に言った瞬間に、そこを引っ張って引っ張って、どこまで話続けるんだよってくらいやるんだけど、そんなこと結局意味なかったじゃんくらいで落ち着くわけ。

大倉ー そろそろすごいですね。

金子ー ネタなんだよ。だからそこをそういう風にやれるか、それとも自分の生き方を詰めてくかどっちで生きてくんだよ。

話題の内容について、一番発言の少ない僕が言うことは何もない。(第1回もひどかったが、第2回は合の手しか入れていない) しかし少ないからこそ Review を書かせてもらっているわけで、それなりに全体の総括はしなければいけないだろう。

僕なりに感じた今回の酒盛りでの一番の収穫は、いかに自分達(他のメンバーは知らないが、少なくとも僕自身は)がくだらない話をしてきたかということだろう。前々から、大層な話をしているとは思ってはいなかったが、ここまでしょうもないとは思っていなかった。サイトにはテキストしかアップしていないが、音源を聞いていると情けなくて逆に笑いがこみあげてきてしまうほどだ。

第1回、第2回を見ていただければわかる通り、話の主体は金子祐介で成り立っている。僕らの発言は“つま”程度の存在感しか有していない。言ってみれば“金子祐介+kumo”状態だ。この状況が面白いわけではないが、“design the discussion”を銘打っている僕らにとっては情けない話である。

だいいち、建築とは関係ないところから建築とリンク、発信していくことをコンセプトとして立ち上げたのにもかかわらず、最初からガチガチの建築トークをしてしまっていることもおかしいだろう。「最初だから」という枕言葉を使うこともできるが、そうしたところでなにも解決はしない。(実は、最初にそういった切り口から入ろうとしたが、共通の話題やネタがないのですぐさま挫折した)

なにせよ僕らには足りないものが多すぎる。ヒクソン・グレイシーは、常々「完璧とは、何かを足せない状態になることではない。何も削るものがなくなった状態のことだ。」と言っていた。まさにその通りで、今の僕ら(学生)が経験して無駄なものなど何一つない。だからこそもっと食欲に生きようじゃないかと言いたい。食わず嫌いせずに色々なことをしていこうじゃないか。

今後の《kumo+》というサイトの発展とリンクして、僕らの個人の発展を垣間見ていくのもこのサイトの“ツウ”な楽しみ方かもしれない。 一山道(2009. 05. 09)



金子- そう、今はね。でもその、自我の問題を問わずしてきた日本の近代っていうのをどういうふうに解き明かすかっていうのが実は僕の問題で、同時に磯崎新さんを語ることになるんだけど。

上野- まあ、まだ全然わかんないんですけど。直感的に、もうそこだけの違いだったと思います。丸山先生と八東先生の違いは。

金子- ちょっと違うかな。実は同じ方向を向いてるの。あの二人。「美のイデオロギー」と「イデオロギーは美しい」というのと、同じなわけ。だから「美しいということがイデオロギーになる」というのと「イデオロギーを美しいという」のとがあって、八東さんは「イデオロギーを美しい」と言ってる。

上野- それがマスとしてみているってことですよ。

金子- そう。だけど丸山さんは「美しいってことがイデオロギーだ」ということに無自覚的に美しいってことになる。でもそれらは実は同じなの、俺から言わせてもらえば。

上野- まあそういう立場をとるっていうのもある。

金子- 僕は第三者的ですよ。

上野- ちょっとずるいなあって気もしますけど(笑)

金子- いや、違うよ。時代を俯瞰してみられる時代に生きてるから、僕は。

上野- なかなか保守主義的。いいんですかそんな守りに入って。

### ポピュリズムを個人から問い直すー

金子- 俺は歴史を描く人。になりたい。あ、偉そうだねえ。そんなこと言ってすいませんほんとに(笑)

上野- 歴史を描いちゃうんですか。

金子- 偉人伝書きたいんだよ。建築偉人伝。あの、史記って知ってる? 司馬遷が書いた史記。

上野- 知ってます。

金子- ああいうの書きたい。

上野- それは歴史をずっとみてきて、それを自己の趣味によってこう、構成してく感じじゃないんですか。

金子- でも歴史は常にそういう風にしか描かれてない。

上野- そうですけど。

金子- だって例えば、太平洋戦争っていうトピックを描かなくても戦争って描けるはずなんだよ。

ああ、現実には起きたって事実を描かなくても戦争って描けるのに、原爆が落ちたってことをトピックにするのはなぜか。あれを反省にしたいから。だって他のことを書いたっていいじゃない。まあ確かにでかいよ。でかい事件だけど、でもそれを書かなくていいわけなのにやる。だからそれと同じように建築家もなにを事件にするかで結構変わる。それが歴史家の役割。なにを事件にするか。

大倉- それはさっきの建築系ラジオの大衆化って話とはちょっと違って、建築界へのメッセージとして?

金子- そうそう。建築家っていう専門家の無知さ、っていうか自分がイデオロギーになってしまうことを気づかずにイデオロギーを演じてしまうことを明確にしてみせる。でも僕もイデオロギーってことをわかってるから、それを反省しながら描くってことが結構重要なんじゃないかって思ってる。くだらねえーなあ俺。そんなことってさあ、そんなこと黙ってやればかっこいいのに、いっちゃ俺って。

上野- 話引き出しちゃった(笑)

金子- いやいや落語家ですから落ちとしてそういうこと言わなきゃいけないんですよ。

山道- でもそれじゃ女の子にモテない(笑)

金子- そういうこと(笑)